

下水処理水を用いたアユの飼育実験施設を公開  
(東京大学)

東京大学の下水道システムイノベーション研究室は14日、東京都下水道サービス(TGS)と共同して進めているアユの飼育実験施設を報道陣向けに公開した。同研究は砂町水再生センター(東京都)の下水処理水を用いてアユを育成するというもの。水が近くにある環境、排水処理や水質管理が可能など、下水処理場のノウハウや地理的条件、下水道資源に着目した取り組みだ。東京都下水道局の下水道技術研究開発センターのフィールドを借りて行われており、施設に用いられるセンサー類は明電舎が提供している。

同研究室の加藤裕之・特任准教授は「水産関係の専門家と話す、水質管理など下水道と共通する点が意外にも多いことに気づかされる。来年度は、オゾンによる処理水の滅菌処理、アンモニアや重金属の除去効果があるとされるゼオライトの導入により水質向上に努めたい」と今後の展開について語った。将来的には、下水処理場を地域の産業・生態系・市民の連携拠点として活用することを目標とし、具体的には、固有種の生息域外保全による生態系の保全・再生拠点、魚と植物を同時に育てるアクアポニックスとしての機能を取り入れていきたいという。

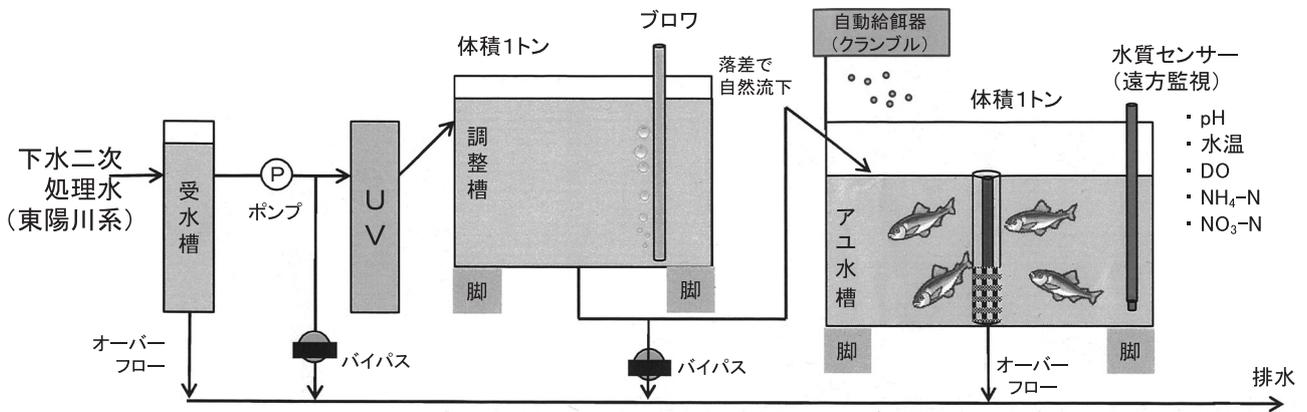


実験施設の外観

アユの飼育は昨年開始。現在育成中の個体は2世代目にあたり、1m<sup>3</sup>の槽内に100匹程度が泳いでいるという。その平均体重もスタート時に0.8gだったものが、体長は13cm、29gにまで成長した。処理水は水温が20℃程度と温かく、冬場の飼育環境として適しているという。



現地視察の様子は  
公共投資ジャーナル社  
YouTubeチャンネル  
で公開中



実験施設のフロー図